

話題を読む

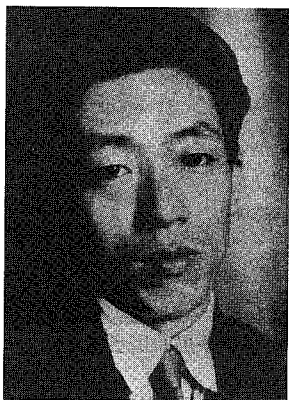
# 没後80年を多喜二ルネサンスの年に

## —小林家の新資料発掘に寄せて

藤田 廣登

はじめに

ここ数年、多喜二祭・多喜二展、



多喜二ウォークなどの取組みが広がり、今日の日本社会の閉塞状況を打ち破っていく力になっていることが実感される。

それは、七沢温泉・福元館「離れ」の発見以来、伊勢崎多喜二奪還事件の再発掘、『戦旗』防衛基金募集関西巡回講演会場の特定と内容、多喜二初期作品の発見（「老いた体操教師」「スキー」）

などに見られる多喜二の事跡の新たな発掘の進展、さらに、この数年を通じて多喜二研究の進展を反映した数多くの著作物の発行によっても生み出されている。

さらには「蟹江船」ブームに刺激された国際的関心の高まりを反映した「翻訳本」の発行・復刻などが十数カ国におよび、多喜二研究者の国際的広がりの中で「国際シンポジウム」が開催（本誌前号・荻野富士夫氏論文参照）される状況を生み出している。

また多喜二の「ノート稿」公開とDVD化が進み、多喜二の作品の執筆過程などの新たな研究も進行している。それは二〇〇八年の「蟹工船ブーム」とは形態の異なった多喜二ルネサンスともいえるべき状況を生み出している。

### 1 小林家「過去帳」・「除籍謄本」の初公開

こうした中で多喜二研究に新たな一石を投じる貴重な資料が小林家の縁につらなる方々によってもたらされた。

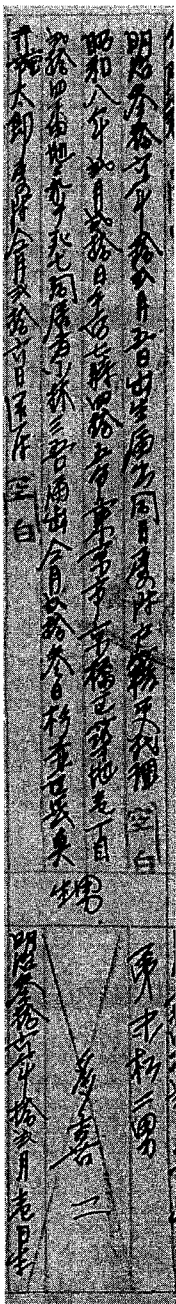
今年三月、多喜二のいとこの孫にあたる小林信義氏（五六歳、医師、札幌在住）と阿部善一氏（註1）が、秋田で開催された多喜二展に小林家の「過去帳」と「除籍謄本」を直接持参して公開された。それは多喜二の生年月日とその家

族関係について従来説の変更と再検討を迫るものとなった。

（1）多喜二誕生日は二月一日？

「除籍謄本」によると多喜二の誕生日は二月一日生まれということになる（写真）。これまで多喜二の誕生日は、母セキさんが記憶する旧暦八月二三日（新暦一月二三日）と記録され、多喜二関係のほとんどの著作物での略歴には「一〇月一三日生れ」と記載されている。小林信義氏は、「両親は新歴を知らなかった」と多喜二

が書いていることから、セキさんはいつの間にか「旧暦一〇月一三日」を新歴と勘違いして記憶したのではないかと推定している。多喜二の生まれた明治三六（一九〇三）年の旧暦一〇月一三日は、新歴では二月一日にあたることから、「除籍謄本」の記載年月日が現実性を帯びてきている。戦前によくあつたといわれる恣意的な届出でなく、戸主の父末松の届出（同年二月五日）に間違いがなければ多喜二の生年月日は二月一日と訂正する必要がある。



今日、その証明は難しい問題を  
はらんでいるが、私は多喜二が、  
学校関係の届け出では「二月一  
日」としていること（例えば小樽  
商大に存在する「生徒詮衡表」〔就  
職選考に必要な学校側資料〕や学  
籍簿に記されていることを重視し  
ている。

また、今般、日本共産党中央委  
員会によって多喜二の「蟹工船  
ノート稿」が公開されたことによ  
り、多喜二がその末尾に「母は新  
歴を知らなかった」「私の生年月  
日は、戸籍上は二月一日」と記  
していることが発見された。

## （2）新たに判明した多喜二の兄 姉姉妹

「除籍謄本」の公開はまた、多  
喜二には、第三吾との間に「末治」

という実弟が存在したことも浮か  
び上がらせた。その末治は他家に  
婿養子に出されていることも今回  
判明した。これに「過去帳」記載  
の早産死去、早世した者を入れる  
とこれまでいわれてきた多喜二の  
兄弟姉妹はさらに増えることとな  
る。

その兄弟姉妹を出生順に見てみ  
よう。①慈幻善孩兒（戒名のみ）、  
②小林多喜郎（長男・一一歳死  
去）、③小林ヤヘ（長女・零歳）、  
④小林チマ（次女）、⑤小林多喜  
二（二男）、⑥小林末治（三男）、  
⑦小林ツキ（三女）、⑧小林三吾（四  
男）、⑨小林多志喜（五男・零歳）、  
⑩小林ユキ（幸・四女）。

多喜二は弟の三吾（東京交響楽  
団バイオリン奏者）について、そ  
の間に末治がいたことを語ってお

らず、早い時期に養子に出されて  
いるため、あるいはその存在を知  
らなかった可能性がある。

## 2 小樽での葬儀―骨箱に赤縄

今年、小林セキ（述）小林廣編・  
萩野富士夫小樽商大教授解説『母  
の語る小林多喜二』が出版された。  
この中にセキさんの記憶として一  
九三三年五月に新富町の龍徳寺か  
ら藤木という若い僧侶をよんで多  
喜二の百ヶ日供養を行ったことが  
紹介されている。

一九七四年に「北海道新聞」で  
多喜二が小樽庁立商業時代に洞爺  
湖温泉・三樹亭を訪ねていること  
が判明したとの記事が話題を呼ん  
だとき、小樽の龍徳寺から洞爺寺  
住職となっていた柳沢祖秀師（七  
三歳・当時）が名乗り出た。師は

「部屋に入ってみると、骨箱に赤  
縄が十字にかけられている。…そ  
こで、すでに仏になったものに罪  
はない。自分は赤縄のかかった仏  
にあげる経は知らぬ。縄を解くよ  
うに」という。家族が「お上の命  
令で勝手に解くわけにゆかぬ。こ  
のまま経をあげて欲しい」と頼ま  
れたが「縄を解かぬと経はあげ  
ぬ」と主張し、「ついに当局も縄  
を解いて枕経をあげた」「お通夜  
は五、六〇人集まっていたが野辺  
送りは立派だった」と回想してい  
る（『洞爺村史』）。多喜二を尊敬  
する気骨ある僧侶の存在は感動的  
だ。

セキさんの記憶する「龍徳寺の  
藤木という僧侶で後に戦死」（同  
書一七七頁）との食い違いがある  
が、柳沢師が伴僧であった可能性

もある。「道新」に多喜二の消息  
記事が出た時に、本人自身が語っ  
た言葉として記録し、今後の検証  
にゆだねたい。

多喜二虐殺の一年後、一九三四  
年二月一九日、品川署での拷問と  
虐待で瀕死の状態となり直後に北  
品川病院で絶命した野呂栄太郎の  
骨壺が針金でくくられて北海道長  
沼町の自宅に還された時、遺族が  
その引き取りを一時拒否したこと  
はよく知られている。絶対主義的  
天皇制の下での特高警察の非人間  
性を記憶の裏に埋もれさせてはな  
らない。

## 3 関東大震災・「亀戸事件」 と多喜二の新たな足跡

一九二三（大正一二）年九月一  
日正午直前に、関東地方をマグニ

チュード七・九の直下型大地震が  
襲った。関東大震災による被害の  
甚大さは死者一三万人余、三五〇  
万人の罹災者に象徴されるが、そ  
の救援活動は遅々として進まず、  
政府は直後に戒厳令を発令し、こ  
の震災に乗じて軍隊、警察と一部  
自警団による朝鮮人、中国人への  
殺戮攻撃が激化する中で、当時、  
東京東部地域、とりわけ亀戸（江  
東区）を中心に発展していた渡辺  
政之輔の指導する南葛労働会の活  
動家や共産青年同盟委員長の川合  
義虎ら一〇名に対する検束、虐殺  
が強行された。世にいう「亀戸事  
件」である。亀戸署の蜂須賀特高  
課長の指揮によるものである。

### 義損募金外国語劇大会出演

当時、小樽高商在学中の多喜二

らは、恒例の学内外国語劇大会の入場料を義捐募金に充てるために例年より「木戸賃」を高くしてフランス語劇・メーテルリンクの「青い鳥」を上演し、彼自身は山羊の役を、後輩の伊藤整はその侍の役を演じて拍手喝采を浴びた。この時点では多喜二の認識はまだ被災者への義捐という一般的認識の域を出ていなかった。

### 平澤計七追悼会へのメッセージ

ついで多喜二が亀戸事件犠牲者と向き合うきっかけが生まれた。当時、多喜二は『文章世界』『文章倶楽部』などに盛んに投稿し入選している。多喜二は山田清三郎らが主宰して始めた『新興文学』に投稿し、震災前の新年号に「健」が、七月号に「数入」が入選し

た。この号には、平澤計七の戯曲「大衆の力」も入選していて多喜二の関心をよぶ。多喜二は、その平澤が亀戸事件の犠牲者の一人であり、弁護士・山崎今朝弥宅で追悼会が開かれることを知り「遙るか、小樽の地から申します」というメッセージを送ります。

この時点では「亀戸事件」の犠牲者の一人である平澤氏と同時入選し掲載された近親感からのものであつたが、その「悲壮な死」への哀悼を表するものであつた。これがこの事件の「階級的性格」を精確に認識するには更なる時間が必要であつた。

### 上京した多喜二が亀戸事件の現場を訪ねたのは何時か

多喜二は一九二九年一月、小

樽商業会議所会頭の磯野進の寄生地主としての悪行とそれと闘う農民の姿を「不在地主」で『中央公論』一月号に実名で執筆したため拓銀小樽支店を依願退職の形で解雇された。彼は「晴れて」執筆活動に専念できる条件とかねて上京して自分の実力を試してみたいという願望の二つの条件を手に入れた。

三〇年三月末上京直後の四月四日には、彼が後に虐殺された築地警察署から二〇〇坪先の築地小劇場で「プロレタリア演劇同盟」の大会であいさつした。上京後の最初の活動の地歩が築地であり、その最期をむかえたのも築地である。ここに多喜二のモニュメントが欲しい。

その多喜二が一九三一年からの



亀戸天神・太鼓橋の上に座っているのが多喜二、左は野田律太（上京後の1930年5月3日貴司山治撮影）

作品の中に「東京のイーストサイド」「渡辺政之輔」「南葛魂」「南葛労働会」をしばしば登場させ、

迫りくる帝国主義侵略戦争への対抗軸としての階級的労働運動を対置させていくのである。

では、多喜二は戦前のわが国の階級的労働運動のメッカ・南葛労働運動をどこで知りえたのか。考えられるのは、手塚英孝編纂になる「写真アルバム」に掲載されている「亀戸天神太鼓橋上」での三一年五月のものとしてされる写真で、彼が元日本労働組合評議会委員長の野田律太らと連れだつて「南葛労働運動・亀戸事件

の現場」を訪ねている事実である。ところが三二年五月訪問前に、すでに多喜二が「壁にはられた写真」（『小説』四月一七日号）で渡辺政之輔について言及しているであり、「五月訪問前」に彼の関心がすでに高い次元に到達していることを示しているのである。

この矛盾は、多喜二らの「南葛労働運動・亀戸事件現場」への訪問の時期がはっきり一年前の一九三〇年五月三日であることが最近になって判明したことによって解決した。

この「太鼓橋上」の写真は貴司山治の撮影によるものであり、『改造』一九三〇年六月号に貴司の「東京のイーストサイド」が掲載され、多喜二らと連れだつて亀戸地域を訪ねていることがわか

る。彼は「日本のプロレタリアートが、重要な記録を残した一九三〇年のメーデーから二、三日目、私は一行四人でわが東京のイーストサイドに……一行の内の一人は小林多喜二だ。もう一人は元の評議会の執行委員長のN君だ」と。

こうしてこの貴司の一葉の貴重な写真の撮影日が特定されたことにより、その後多喜二が反戦運動に献身しつつ、同時にその後の作品に結実させ、「転形期の人々」「沼尻村」「党生活者」、「地区の人々」などに亀戸事件・南葛労働運動から学んだ成果を結実させていくことになるのである。

「転形期の人々」(三二年九月起稿)の中に「東京では『南葛労働者』か『南葛魂』と云えば、それはもつとも闘争的な労働者の代

名詞となつているし、その輝かしい伝統が、優れた後継労働者を生むしるしにもなっているんだ。今俺だちがたった一步左へ寄るか、右に脱け落ちるかでこれから五年も十年の間、小樽の労働運動に汚い伝統を与えるか『南葛魂』に負けない輝かしい伝統を与えるか、そのどっちでも与えることの出来るケジメに立っているんだ」というくだりがある。小樽総労働組合の上部団体加盟を評議会にするか右翼的な総同盟にするかの大激論を描いたものである。私は、かつて統一労組懇運動から全労連結成への転換期に、この多喜二の言葉を、いま俺だちが引き継いでいくんだ！と胸に秘めて労働者教育協会の活動に参加していたことを、昨日のように思い

出している。そして今日、日本の労働現場の困難、非正規労働者の増大、「日比谷派遣村」「政治の反動化」に象徴される閉塞状況の打開のために多喜二から学ぶことの意義の大きさをかみしめている。

(註) 秋田・大館の多喜二の生家は昔宿舍だった広い家で、下川沼中学校長・阿部孫吉氏に家半分を貸していた。阿部校長は児童、親に尊敬されていた。善吉氏はその戸籍上の孫にあたる。

(本稿の執筆に当たって小林信義氏をはじめ多くの方々の教示をいただいたことを記して謝意を表します)